

オリンピック・パラリンピックは、コロナや政治や金にまみれたけれどNHKは

繁野玖美・作業療法士・

竹内哲哉様

昨年の夏、私はオリンピック・パラリンピックの開催に反対していた。デモには参加しなかったが、署名はした。テレビの競技中継も全く見なかった。今年に入って、オリンピックをめぐる贈収賄事件の報道を見るたびに「やはり開催すべきではなかった」という想いを強くしていた。

講義を聞いて、その気持ちが変わることはなかったが、竹内さんはじめNHKの方々はどういう想いをもって番組を制作していたのか、その一端を知ることができた。

興味深かったのは、放送における障害の伝え方を医学モデルではなく社会モデルで行い、用語ひとつとっても丁寧に検討されていたことである。

たとえば、「車いすの竹内さんは車いすであるにも関わらず、頑張って大学に通っています」は、社会モデルでは「竹内さんは車いすを使って大学に通っています。通学路はバリアフリーではありません。このため、不便もあります」となるのだろうか。

さらにこれを人権モデルで伝えるとしたら、前述したものに「車いすユーザーも、ベビーカーユーザーも、足腰の弱った人も、見えにくい人も、誰もが事故のリスクなく利用できる公共交通とは何でしょうか」ともなるのだろうか。

こうしてみるとメディアは社会と常に密接にかかわり、伝える人の立ち位置が番組や記事を大きく左右するものであることを改めて感じた。

また、竹内さんは「超人たちだけが活躍できる社会にしてはいけない」、「ざっくり言えば、障害者だって“ふつー”の人、いい奴もいれば、悪い奴もいる！」と述べている。

私も仕事で障害のある人と接するときに、その人の人間性や環境の問題を障害のせいにしてしまうことがある。

でもそうではないのだ。環境にかかわらず善人もいれば悪人もいる。善人であっても事の成り行きで悪人になることもある。逆もある。それが人間なのだ。障害のある人だけ別だと考えることは竹内さんもおっしゃる通り差別なのだ。

今回のオリンピック・パラリンピックはコロナや政治や金にまみれ、本来の意味を見失ってしまったと思う。しかし、おそらく今後もこうした傾向は続くのではないだろうか。

オリンピックやパラリンピックに社会を良い方向に変えていく力があるのかどうかは、正直言って疑問である。むしろ、竹内さんが面接をした3人のリポーターのような、障害のある若者たちがますます活躍できる場を増やすことの方がずっと大切な気がする。